

革命のレッスン

涙子（なみだこ）

65歳

…俳優

三国芙美（みくにふみ）

30歳

…記者

賀来梨香子（かくりかこ）

20代時点

…駆け出し俳優

佐渡島（さどじま）

40代時点

…芸能事務所社員

涙子の自宅。

東京の郊外にある一軒家。歴史ある、古い家のリビング。

中央にソファセット、上手に玄関からの出入り口。
壁には窓。光がさしこんでいる。

1場 取材の開始

涙子がソファに座りコーヒーの説明書を見ている。

チャイムが鳴る。

涙子が慌てて時間を見る。

涙子 「はい」

涙子、ざつとあたりを片づけて部屋を見回す。

テーブルにアルバムが出ていることに気づき、片づけて玄関へ

涙子の声 「ああどうも」

三国の声 「すみません。少し早かったですか」

涙子の声 「いえいえ。大丈夫ですよ」

三国の声 「ご連絡させていただいた三国です」

涙子の声 「涙子です。遠いところどうも。さあ、入って」

三国の声 「お邪魔します」

涙子と三国が入ってくる

涙子 「こちらへどうぞ」

三国 「ありがとうございます」

三国は家を見回す。

涙子 「古い家でしよう」

三国 「あ、いえ、すてきです」

涙子 「楽しんでください」

三国 「あ、はい。ありがとうございます」

三国は部屋を見ている

涙子 「この辺は昔は田んぼばかりだったからね。土地だけは広いのよ。建物も庭も
だいぶガタがきてるからもうちよつと手入れすればいいんだけど私ひとりだど
うもね」

三国 「レッスンはここでやっていたんですね？」

涙子 「ええ」

三国 「おひとりでお住まいなんですか」

涙子 「悪い？」

三国 「悪い？あ、いえ。……あの、お写真撮らせていただいてもよろしいでしょうか？」

涙子 「いやだ、恥ずかしい。しょうがないですね（ポーズ）」

三国 「（部屋の写真を撮る）」

涙子 「……」

三国 「あ、もちろん、先生も」

涙子 「お座りになったら？」

三国 「あ、はい。失礼します」

涙子 「緊張なさってる？」

三国 「すみません」

涙子 「いいんですよ。私なんかで」

三国 「いえ。世界中から注目されている方ですから」

涙子 「やめてくださいよ」

三国 「改めて、本日は取材をお受けいただきありがとうございます」

涙子 「いえいえ」

三国 「貴重な機会をいただけて光栄です」

涙子 「特別ですよ。あなただけ」

三国 「……はい。では、先生、早速お話をお伺いしてもよろしいでしょうか」

涙子 「まっつて、その先生っていうのやめてくれる？私はあなたになにも教えてないし」

三国 「……なんと呼びすれば」

涙子 「お好きにどうぞ」

三国 「では、涙子さんと呼びさせていただきます」

涙子 「そうしましょう。私はなんと呼びましょうか？失礼、お名前は…」

三国 「三国英美です」

涙子 「ごめんなさい。忘れっぽくて。お名刺いただいたかしら？」

三国 「あ、失礼しました」

三国が名刺を渡す

涙子 「三国さんね、週刊民衆の記者さん」

三国 「よろしくお願いします。では……」

涙子は名刺を見て何か考えている

三国 「どうか……なさいましたか？」

涙子 「いえいえ……ここ最近、取材とか怖くなっちゃってて」

三国 「大変でしたか」

涙子 「そりゃあねえ。スマホがずっとピロピロピロ……爆発するんじゃないかってくらいかかってきて。そのうち家の電話まで鳴り出してコード引っこ抜きましたよ」

三国 「すみません」

涙子 「あなたが悪いんじゃないけどね。ピンポン鳴らしてくる人もいるしもう最悪。一番酷い時なんて外の塀の上にカメラ持った人が並んで電線に止まってるスズメみたいでしたよ。でもあなたは礼儀正しい人みたいで大丈夫そう」

三国 「ご期待に沿えるようがんばります」

涙子 「よろしく……それで、何について、お知りになりたいの？」

三国 「はい、今日の取材のテーマは、ズバリなぜ賀来梨香子はスピーチで涙子先生の名前を出したのか、です」

涙子 「……ああそうね。そりゃそうか」

三国 「なにか……？」

涙子 「いえいえ。そうか、梨香子ね……」

涙子の態度が変わる

三国 「……もちろん、賀来さんとのことが中心になるんですが、先生についてもキチンと掘り下げたいと思っておりますので」

涙子 「あら別にそんなつもりじゃないんだけど？」

三国 「いえいえ、涙子先生を中心として、賀来さんのお話を」

涙子 「ねえそれやめない？」

三国 「何をですか？」

涙子 「賀来さん。なんか水戸黄門みたい」

三国 「ああ……どう呼べば」

涙子 「梨香子でいいでしょ」

三国 「では梨香子で。梨香子を通して、レッスンの内容をお伺いできれば」

涙子 「でもねえ、大したお話はできないと思うんですよ」

三国 「そんなことありません。先生はアカデミー主演女優を育てたお方ですから。世
界中が注目しています」

涙子 「……そう？」

三国 「そうですよ。先生のレッスンは」

涙子 「先生やめて」

三国 「……すみません」

涙子がキャビネットへ、三国は気合を入れなおす

三国 「あの、先ほどは失礼しました。梨香子についてと申し上げたのは、会社として
はそこを主として話を聞いてくるように言われただけで、私個人としては涙子せ
ん……涙子さんのレッスンにフォーカスを当てたいと思っております」

涙子 「……」

三国 「賀来梨香子以外の生徒さんにも取材させていただいたんですが、確信しました。
やはり涙子さんのレッスンには特別な力があると思うんです。ぜひ、よろしくお
願いいたします」

三国が頭を下げる。

涙子が強めにコーヒー豆を叩く

涙子 「よし」

三国 「……」

涙子 「ああごめんなさい。コーヒーでいいかしら」

三国 「はい……」

涙子 「段取りが悪くて。あなたが来るまでに準備しようと思ってたんだけど」

涙子はコーヒーの準備をしながら話す

三国 「はあ」

涙子 「お土産でもらったただけだね。淹れ方が変わってるみたいで。知ってる？西部
開拓時代」

三国 「開拓時代？」

涙子 「カウボーイコーヒーっていうんだって。（説明書を読む）……豆はバンダナに
包んでハンマーで細かく砕く。もしくは袋やソックスに入れて岩などに叩きつけ
て細かくしましょうって」

三国 「それは……大変ですね」

涙子 「そうなのよ。でもせっかくだから美味しく飲みたいじゃない？やっとなん分く
らいできた」

三国 「ありがとうございます」

涙子 「ソックスに入れて振り回すのもやってみただけだね」

ソックスに入れた豆を取り出す

涙子 「さつき庭で岩にぶつけてたらご近所さんにすごい目で見られちゃって」

涙子、ソックスを振り回す

三国 「あ、危ないです」

涙子 「腕痛い」

三国 「普通にコーヒーマイルで挽いたらどうですか？」

涙子 「そんなの面白くないじゃない。せつかくのカウボーイなんだから」

三国 「なるほど……」

涙子 「ねえちよつとやってみない？」

三国 「え」

涙子 「カウボーイ気分。結構楽しいの」

三国 「いえいえ、不器用なので」

涙子 「大丈夫よ。そのへんぶつけちゃってもいいから」

三国 「いえ、ほんとに」

涙子 「そう？残念……イエスアンドでいきましょうよ」

三国 「なんです？」

涙子 「イエスアンド。お互いを肯定していかなきゃ」

三国 「肯定ですか」

涙子 「そう。相手の提案を受け入れて、自分もアイデアを足す。そうすると建設的なコミュニケーションになるの」

三国、あわててメモをとる

三国 「それが先生の教えですか？」

涙子 「ええ？」

三国 「お互いを肯定しあうことで生徒さんの成長を促すっていうことですか？」

涙子 「いや違いますよ。イエスアンドなんて役者の基本ですよ。誰でも知ってる」

三国 「そうなんですか」

涙子 「何を期待されて来たか知りませんが、あなたが求めているようなことは何にもしやべれないと思いますよ。ね、ここに置いときますから、やってみたくなくなったらいつでも振り回してね」

三国 「……ありがとうございます。まずは涙子さんの経歴からご確認させてください。涙子さんは、都内で活動していた劇団『自然会議』での舞台がデビュー作ですよ。ね。1980年」

涙子 「よくご存じで」

三国 「調べさせていただいてます。劇団で舞台の経験を積まれ、劇団が解散になってから、いまの事務所に入られた」

涙子 「そうですね。たまたま芝居を見た事務所の人にお声かけてもらってね」

三国 「事務所に所属されてからは映像のお仕事もされるようになった。俳優へのレッスンを始めるまではどういった経緯だったんですか？」

涙子 「そうですね。流れっていうか、私がやりたいっていったわけじゃなかったんだけど、事務所に人に頼まれてね。どうしてもって言うから」

三国 「始めは乗り気じゃなかった」

涙子 「いまでも別にやりたいとは思ってませんよ。私は役者。芝居するのが仕事なんだから。レッスンを始めた当初もそう言ったんだけどね」

三国 「そうでしたか。ご自身の出演の合間を縫っての演技指導は大変だったんじゃないですか？」

涙子 「そりやそうですよ。忙しい合間のたまの休みができたと思ったら若い役者のお守りを入れられるんだから。困ったもんですよ」

三国 「でも、その結果、日本人初のアカデミー主演女優が生まれた」

涙子 「……まあね」

三国 「スピーチを聞いてどう思われました？」

涙子 「どうって……」

三国 「引用しますね」

涙子 「いいって。もうやめてよ」

三国 「（メモを見て）日本人として初めての賞をいただき光栄です。今まで私に関わってくれたすべての方に感謝いたします。特に私をずっと支えてくれた両親には一番に感謝を伝えたいです。そして……それと、涙子先生には感謝しています……」

涙子は恥ずかしそうにしている

三国 「両親の次に涙子先生ですよ、これは相当な影響を与えたといえますよね」

涙子 「そんなことないですよ」

三国 「授賞式からもう一か月……一貫して取材をお受けになっていませんよね」

涙子 「別に受けないつもりは無かったのよ。でもさっき言ったけどみんな強引で。怖くなっちゃったわけ。……それにねえ、梨香子にレッスンをしたのなんてほんの一週間くらいだし、本当に特別なことは何にも教えてないんですよ。」

三国 「だったら、なぜ梨香子は先生のお名前を出したんでしょう」

涙子 「それこそ梨香子に聞いてくださいよ」

三国 「そうしたいのはやまやまなんです、梨香子もあのスピーチ以来、先生についてお話しにならないんです」

涙子 「……どういふつもりなんだか」

三国 「共演のお話などは無かったんですか？」

涙子 「梨香子と？ありましたよ。たっくさん。全部断ってやりましたけど」

三国 「お断りに？」

涙子 「当たり前ですよ。何が悲しくて昔の生徒から仕事をもらわなきゃいけないんですか。役者は実力で仕事を呼び込むものです」

三国 「……なるほど」

涙子 「ごめんなさいね、つまらない話で」
三国 「いえいえ！それも涙子さんの哲学ですね。貴重なお話です」
涙子 「前向きなこと」
三国 「イエスアンドでいかせていただきます」
「あら」
三国 「ではさっそく、賀来梨香子のレッスンについてお話をお伺いさせてください。
先生にとつての初めての生徒が賀来梨香子だったんですね？」
涙子 「そうですね」
三国 「10年前、2016年のことですね」
涙子 「あの時は事務所の人から急に頼みがあるって言われてね」

2場 梨香子との出会い

佐渡島が出てくる

佐渡島 「何が嫌なんだよ」
涙子 「なんとも言ってるじゃない。私は役者。教えるのは仕事じゃない」
佐渡島 「講師をやってる俳優なんてたくさんいるだろ」
涙子 「自分がまだその道を極めてもないのに人に教えるなんて最低です」
佐渡島 「頑固だなあ……」
三国 「あの、この方は？」
涙子 「（三国に）佐渡島さん。事務所のお偉いさん。私を誘ってくれた人ね」
佐渡島 「ナミにとつても悪い話じゃないんだって。わかってるだろ。ちよつと若い子の
面倒見てくれればそれでいいんだよ。やってくれば多少はナミにもギャラを払
えるし」
涙子 「他の役者に頼みなさいよ」
佐渡島 「頼んでるよ。でもそんなにいないんだよ。誰でもいいってわけじゃない。ある
程度経験を積んでいて、コミュニケーション能力があつて、それに、……時間が
ある人」
涙子 「あんたが仕事とつてこないからでしょ」
佐渡島 「こないだファックスしたよな。オーディション。あれどうなった？」
涙子 「オーディション？……ああ、行つてない」
佐渡島 「はあ？近藤監督の映画だぞ。なにしてんだよ」
涙子 「無理に決まつてんでしょ」
佐渡島 「なんでだよ」
涙子 「無理でしょ」
佐渡島 「わかんないよ」
涙子 「無理だつて！あれ女子高生役じゃない」
佐渡島 「チャレンジしろよ。ほら森光子さんだつてさ……」
涙子 「そろそろいい？私だつていろいろあるの。忙しいんだから」

佐渡島がクロスワード雑誌を手にする。

佐渡島 「全部解いてある。こんなもん暇人しかやらないの」

涙子 「…」

佐渡島 「うわ。オリジナル問題を作ってみようまでやってある」

涙子 「趣味なの！」

佐渡島 「……あのさ、真面目な話なんだけど」

涙子 「（三国に）ちよっとここからは聞かないでおいてね」

佐渡島 「うちの会社は大手だけどさ、それでも結構厳しくてね。規模縮小しようっていう話もある。あんまり多くは抱えておけない。正直に言うよ。このままいくと、ナミがうちの事務所に居続けるのは難しいと思う」

涙子 「……」

佐渡島 「もちろん今すぐどうこうって話じゃない。だけど、そういうことになるかもしれない。でも俺としてはそうなってほしくないんだよ。うちの若い子たち向けの講師をしてくれれば事務所にいる理由になる。外向けの仕事じゃないし、不本意だとは思うんだけど」

涙子 「……」

佐渡島 「頼むよ。レッスンっていつでもそんなに本格的にやらなくてもいい。うちとしても若い子を預かる以上、ちゃんと育ててますよっていう形をとらないといけないんだ。すぐ他に移られちゃうしね。だからまあちよっとアドバイスしてくれればいいんだ」

涙子 「……」

佐渡島 「ひとりここに寄越すから。よろしくな」

涙子 「ここで？」

佐渡島 「わざわざ稽古場まで来てもらうのも悪いからさ、ここでできるだけのことでいいよ」

涙子 「（溜息）いつからよ」

佐渡島 「今から。待たせてんだよ」

涙子 「ええ！？」

佐渡島が玄関へ。梨香子を連れてくる。

梨香子が入ってくる。入口で止まり、ペコリと頭を下げる。

佐渡島 「挨拶」

梨香子 「賀来梨香子と申します。よろしく願います」

佐渡島 「汚いとこだけど」

涙子 「あんたが言うな」

佐渡島 「そんなわけでよろしく。来週、舞台のオーディションがあるんだ。その課題を見てやってくれ。持ってきてるよね？」

梨香子 「はい」

梨香子、オーディションの概要と課題の紙を出す。

涙子 「オーディション？小田さんの舞台か、新国立、大きな舞台じゃない」

佐渡島 「じゃあそういうわけで」

涙子 「待ちなさいよ。何を教えればいいの」

佐渡島 「芝居のイロハだよ。一通り教えてあげて」

涙子 「一通りって……（梨香子に）ご経験はどれくらい？」

梨香子 「経験ですか？なんのですか？」

涙子 「舞台とか」

梨香子 「いえ特に」

涙子 「特に？お芝居の経験ですよ？」

梨香子 「ありません」

涙子 「（佐渡島をにらむ）」

梨香子 「……あ、でも小学校の6年生を送る会で妖精の役をやりました」

涙子 「あら良かったねえ（佐渡島に）どうしろっていうの」

佐渡島 「頼むよ」

涙子 「ド素人じゃない」

佐渡島 「なんとかしてくれよ」

涙子 「受かるわけないでしょ」

佐渡島 「いいんだよ。役を取れるとは思ってないよ。経験させたいんだよ。だから失礼にならないレベルになればそれでいいから」

涙子 「なにそれ……」

梨香子 「あの、ご迷惑なようなら遠慮させていただきますので」

涙子 「そうしてくれる？」

佐渡島 「ちよつとまった！大丈夫だよ。涙子先生に任せておけばなにも問題ないんだ。な、この通り」

佐渡島、涙子に頭を下げる

涙子、少し考える

涙子 「そうね。まあ、やつてもいいかな」

佐渡島 「そうだよな。助かるよ。じゃあそういうことで」

涙子 「たまたま、私も受けるオーディションだからね。私の稽古に付き合ってもらえれば、それでいいんじゃない？」

佐渡島 「ん？」

梨香子 「先生も受けるんですか？」

涙子 「そうなのよ。偶然。だから一緒に稽古するっていいことならいいけど」

梨香子 「ぜひお願いします！」

佐渡島 「いやそれは……」

涙子 「ねえ佐渡島さん。私のプロフィールも先方に送ってあるんですよ？」

佐渡島 「……もう書類審査は終わってるんだよ。次は二次審査」

涙子 「でも、ねじ込んでくれたんですよね？」
佐渡島 「……」

涙子 「ねえ？」

佐渡島 「……」

涙子 「二人で受けるオーディションの稽古をする、そういう条件でいいかしら？」
梨香子 「もちろんです」

涙子、梨香子越しの佐渡島に問いかける

涙子 「そういう条件でいいかしら？」

佐渡島 「（うなづく）」

涙子 「じゃあ決定。そういうことで、佐渡島さん、あとはまかせて」

佐渡島 「……くれぐれもよろしくな」

涙子 「そちらも」

佐渡島が出ていく

涙子は溜息をついてソファに座り、クロスワードをやり始める

梨香子 「あの、よろしくお願いします」

涙子 「はいよろしく。ごめんなさいね、お名前……」

梨香子 「賀来梨香子と申します」

涙子 「賀来さんね。涙子です。よろしく」

梨香子 「よろしくお願いします」

涙子 「で、何を教わりたいの？」

梨香子 「何を…教われればいいんでしょうか」

涙子 「賀来さん、賀来さんてお呼びしていい？」

梨香子 「えっと……」

涙子 「先に行っておくけど、期待しないでよね」

梨香子 「はい？」

「私は誰かにものを教えるのが仕事じゃない。私は役者なの。今回はたまたまこ
うなってるだけ」

梨香子 「はい……」

涙子 「課題をもう一回見せてもらえる？」

梨香子 「はい……先生はお持ちじゃないんですか？」

涙子 「え？」

梨香子 「先生もオーディションを受けられるって」

涙子 「ああ、そうね。いま手元になくてね。……念のためコピーとらせてもらっていい？」

梨香子 「どうぞ」

涙子 「『じゃじゃ馬ならし』か。カタリーナのセリフね、——まあ、なんという顔なさるの！その眉根の皺を解いて、怖い目つきをおやめになったら。それは御主人を傷つけることよ、あなたの殿様を、あなたの王様を——ふーん……」

梨香子 「なんだかよくわからなくて」

涙子 「何が」

梨香子 「誰にしゃべってるのかもわからないし、どういう状況なんでしょうか」

涙子 「考えなさいよ」

梨香子 「……」

涙子 「……読んだの？」

梨香子 「はい？」

涙子 「台本は全部読んだの？」

梨香子 「？……はい」

涙子 「最初から？」

梨香子 「最初？」

涙子 「え？」

梨香子 「読みましたよ（台本の紙を示す）」

涙子 「これで全部じゃないですよ？」

梨香子 「そうなんですか？」

涙子 「これは『じゃじゃ馬ならし』っていう長いお話の一部じゃない。全部読まなきゃ状況はわからないでしょ」

梨香子 「そうなんですか」

涙子 「マジ？（頭を抱える）」

梨香子 「これしか貰ってないんですけど」

涙子 「買って読みなさいよ」

梨香子 「自分で買うんですか」

涙子 「（溜息）」

梨香子 「近くに本屋さんありますか？あ、ていうか普通の本屋さんで売ってるんですよか」

涙子 「ちよっと待ってて」

涙子、別の部屋へ行く

梨香子は部屋を見て回る

涙子が本をもつて戻ってくる

涙子 「賀来さんはどうして役者になりたいの？」

梨香子 「どうしてっていうこともないんですけど……やってみたいなあとって」

涙子 「それだけ？」

梨香子 「あと……母が、私が舞台に立つ姿が見たいって」

涙子 「ふうん。まあ夢を追うのは自由だけどね。この舞台には受からないと思いますよ」

梨香子 「そうですか」

涙子 「大きな舞台ですからね。素人じゃとても」
梨香子 「……」

涙子が文庫の『じゃじゃ馬ならし』を渡す

梨香子 「いいんですか？」

涙子 「レッスンはまたにしましょう帰って読んできて」

梨香子 「今日はやらないんですね」

涙子 「どんなお話なのかも知らずに稽古しても意味ないもの。オーディションは来週でしょ？明日は来れる？」

梨香子 「大丈夫です！読んできますね」

涙子 「一晩で読める？」

梨香子 「本を読むのは好きなんです。ありがとうございます！涙子先生」

涙子 「……」

梨香子 「どうしました？」

涙子 「なんでもない。じゃあ、また明日の同じ時間に」

梨香子 「よろしくお願いします、先生」

梨香子、頭を下げ嬉しそうに帰っていく

三国に向き直って

涙子 「懐かしい」

三国 「賀来梨香子はまったくの素人だったんですね」

涙子 「そう。びっくりしちゃった。結構しゃべったね」

三国 「すみません」

涙子 「あ、コーヒー淹れましょ。どんな味かしらね」

三国 「楽しみです」

涙子、以降の会話をしながらコーヒーを淹れる

涙子 「……ねえ。本当は弟さんの話を聞きたいんじゃないの？」

三国 「……」

涙子 「弟さん、私の生徒だったんでしょ？ 賀来梨香子のことじゃなくて本当は弟さんのことを聴きにきたんじゃないの？」

三国 「やっぱりそれで取材受けてくださったんですね」

涙子 「まあね。メール見てびっくりしちゃった。弟が昔先生のレッスンを受けてたんですって。ねえ何年位前の話？」

三国 「5、6年前ですね」

涙子 「三国さん…じゃないか。ご結婚なさってる？」

三国 「いえ。弟も三国です」

涙子 「全然覚えてない。ごめんなさい」

三国 「いえいえいいんです」

涙子 「弟さんは今も役者やってらっしゃるの？」

三国 「いえ、もう全然。先生のレッスンを活かせなかったみたいです」

涙子 「そう……残念」

三国 「生徒さんたちとは連絡をとってらっしゃらないんですか？」

涙子 「ええ。連絡先を交換しないようにしてるの。なんていうか、距離を保つために」

三国 「なるほど。じゃあ生徒さんたちのその後のことはご存じないんですね」

涙子 「ええ。梨香子もあんな大女優になってるなんてねえ」

コーヒーを淹れ終わる。

涙子 「さあできましたよカウボーイコーヒー。どうかな」

三国 「いただきます」

二人でコーヒーを飲む
間

涙子 「……どう？」

三国 「そうですね……とても美味しいです」

涙子 「イエスアンドしなくていい」

三国 「まずいです」

涙子 「……こんな感じなの？（説明書を見る）」

三国 「口に豆のかけらが」

涙子 「そうね……味も薄いし……」

三国 「もつと細かくしなきゃいけないのかも」

涙子 「おかしいな……」

涙子は説明書を睨んでいる

三国 「コーヒー、凝ってらっしゃるんですね」

涙子 「まあそれほどじゃないんだけどね。いろいろ試してるの」

三国 「へえ。私はいつもインスタントです」

涙子 「結構違いがあって面白いのよ。淹れ方で味も変わるし」

三国 「でもこれは失敗でしたね」

「いいじゃない。失敗を恐れてちゃんにも始まらないの。気になったら試してみる。ちよつとだけ変えてみる。そういうところから新しい発見があるんだから。失敗を歓迎しましょう」

三国 「……私もレッスンを受けているみたい」

涙子 「あらごめんなさい」

三国 「いえ、嬉しいです。こうやって先生は生徒さんたちに影響を与えていくんですね」

涙子 「別にそんなつもりないですよ」

三国 「……でも先生、先生のレッスンを受けた人は確実になにか変化があると思うんですよ。それってちょっと怖いことじゃないですか？」

涙子 「なにそれ」

三国 「あ、いえ、コーヒーならいいけど、生徒に対しては失敗できないんじゃないかなって」

涙子 「……大切なことはね。失敗を無かったことにしないこと。しっかり見つけて、受け入れる。そうすれば成功も失敗もないの」

コーヒーに口をつけようとして、そのままキャビネットに片づける。

三国 「あの、続きをお聞きしてもよろしいでしょうか。梨香子と会った翌日からレッスンを始めたんですね」

涙子 「そう。じゃあさっきの続きからね」

三国 「お願いできますか？」

涙子 「ええ。じゃあ……レッスン開始の日ね」

3場 レッスン初日

梨香子がジャージ姿で目隠しをしている。

涙子はソファに座ってクロスワードをやっている。

梨香子 「あの……これ大丈夫ですか？」

涙子 「ちよっと待ってね」

間

梨香子 「これって演劇の稽古なんですか？」

涙子 「当たり前じゃない」

梨香子 「これがですか？」

涙子 「ねえ、料理はする？」

梨香子 「料理ですか？」

涙子 「お菓子作りとか」

梨香子 「まあ、人並みくらいかと」

涙子 「あそう。じゃあだめか」

梨香子 「……なにがでしようか」

涙子 「チョコレートを滑らかにすることってなに？」

梨香子 「なんですか？」

涙子 「チョコレートを滑らかにすること。最後がグ」

梨香子 「あの……」

涙子 「グ……グ……」

梨香子 「テンパリング、じゃないですか」

涙子 「テンパリング……それだ！すごいじゃない！よく知ってる。ポンデリングしか出てこなくて。あ、するところが……そうか……で、こっちが……あーできた。これがいいのよ。たったひとつの言葉だけでパーッと視界が開けてく感じ。ねえ？」

梨香子 「あの先生、稽古を……」

涙子 「そうねじゃあ始めましょうか」

梨香子 「よろしく願います」

涙子 「じゃあちよつと歩いてみましょうか」

梨香子 「あの……台本読んできたんですけど」

涙子 「そんなの後後。指示を出すからその通りに動いてね。じゃあまずまっすぐ歩く」

梨香子 「え！？」

涙子 「歩く！」

梨香子 「歩く！」

梨香子、歩けない

涙子 「なにやってんの。さっさと歩きなさいよ！」

梨香子 「無理です」

涙子 「大丈夫。ちゃんと指示出すから。私を信頼して。ほら背筋伸ばして。歩く！」

涙子、手拍子で梨香子を歩かせる

涙子 「ストップ！右に90度回転して……歩く！」

涙子が梨香子をコントロールして部屋の中を歩かせる。

涙子 「はいOK！お疲れ様でした！」

梨香子 「ありがとうございました」

梨香子、目隠しを外してへたり込む

涙子 「じゃあ次ね」

梨香子 「まだあるんですか！？」

涙子 「今度は真後ろに倒れてみましょう」

梨香子 「え！？」

涙子 「はい立って！」

梨香子 「倒れる？」

涙子 「ほら立って。はい立って。はいはいはいはい」

手拍子で梨香子を立たせる

梨香子 「それやめてください！」

涙子 「はい、後ろに倒れるよ。棒みたいに身体をピンとしてね」

梨香子 「なんなんですか！」

涙子 「大丈夫。ちゃんと支えてあげるから」

梨香子 「無理です」

涙子 「何がよ」

梨香子 「できません」

涙子 「できるって」

梨香子 「できない」

涙子 「できる」

梨香子 「できない」

涙子 「やりなさい！」

梨香子、微動だにできない

涙子 「……あんたねえ、できないできないって。なんなのよ。まずチャレンジしなさいよ」

涙子、しゃべりながら缶コーヒーを飲む

梨香子 「……これなんの練習なんですか！？」

涙子 「芝居の練習に決まってるでしょ」

梨香子 「これが……？」

涙子 「不満なの？」

梨香子 「だって……台本読んだりしないんですか？」

涙子 「台本なんてまだまだ先！」

梨香子 「……せっかく読んできたのに」

涙子 「つべこべ言わない。新人はまず言われたことをやりなさい」

梨香子 「でも今度のオーディションにアクションシーンは無いと思うんですけど」

涙子 「そうじゃないんだって！……だから……なんでわかんないの」

梨香子 「説明してください」

涙子 「言ってもわかんないよ」

梨香子 「納得してやりたいんです」

涙子 「説明したらやんの？」

梨香子 「たぶん」

涙子 「……だから……怖かったですよ」

梨香子 「はい」

涙子 「そういうことよ」

梨香子 「……どういことですか」

涙子 「だから……ちょっと、こう……わかってよ」

梨香子 「……」

涙子 「だから、私とあなたが共演者だとするでしょ？で、私が飛び降りたりとか、そういうこともあるわけ。そういう時にあなたが支えてくれないとダメでしょ」

梨香子 「……んん？」

涙子 「なんでわかんないの！」

梨香子 「わかりません！」

涙子 「だから……芝居って一人ではできないものなの。だから……そう！信頼しなきゃいけない」

梨香子 「……信頼」

涙子 「そう。そのための練習。怖かったと思うけど私のことを信頼して身を委ねる。そういうこと。いっしょに芝居をする相手のことを全力で信じなきゃ……いまの結構先生つぼくなかった？」

梨香子 「ぼいというか……先生なので」

涙子 「さ、じゃあ再開しましょうか」

梨香子 「まだやるんですか……」

涙子 「もちろん。説明したんだから。やりなさいよ。ほら立って！」

涙子、手拍子を始める

涙子 「信頼！信頼！信頼！信頼！」

梨香子、ドアへ

涙子 「なに。やめんの？」

梨香子 「もういいです」

涙子 「諦めるのね？」

梨香子 「先生が言っていることは支離滅裂です」

涙子 「……どこが」

梨香子 「意味がわかりません」

涙子 「……だとしてもね。まずやるの。やらなきゃなにも始まらない」

梨香子 「できません」

涙子 「なんでよ」

梨香子 「……先生のことを信頼できません」

涙子 「そんなの……」

梨香子 「嘘つきです」

涙子 「嘘？」

梨香子 「会ったばかりの人を信頼するなんてできるわけじゃないじゃないですか！」

梨香子がドアに手をかける。

涙子 「賀来さん！」

涙子が後ろに倒れる。

梨香子 「嘘でしょ……ほんとに？……あああああ！」

梨香子が悲鳴をあげながらなんとか支えようとする。が、支え切れずに二人とも倒れる。

涙子 「ちゃんと支えてよ……」

梨香子 「急に危ないじゃないですか！」

涙子 「危ないのはこっち。いたた……」

梨香子 「なんなんですか……」

涙子 「あんたがやらないからでしょ」

梨香子 「大丈夫ですか？」

涙子 「心配するくらいならちゃんとやりなさいよ」

梨香子 「なんなんですか、もう」

涙子 「ね？」

梨香子 「……」

涙子 「……よし。こうしましょう。これからの稽古中、私は突然倒れます」

梨香子 「は？」

涙子 「いつ倒れるかわからないから、すぐ支えること。できなければ私が怪我します」

梨香子 「……なんでそんなことするんですか」

涙子 「しょうがないじゃない。あんたがやらないなら私がやるしかないでしょ」

梨香子 「そんな……」

涙子 「いい？とにかくやってみなさいよ」

梨香子 「……でも」

涙子 「なに」

梨香子 「自信ないです」

涙子 「あたりまえじゃない。初めてやるんだから」

梨香子 「……でもそうしたら先生が」

涙子 「甘くみないでくれる？何年舞台やってると思ってるの？」

涙子、腰を気にしながら無様に歩く。

その様子を梨香子が見ている。

涙子 「いい？気を抜いたらすぐ倒れるからね」

梨香子 「（小さく笑う）」

涙子 「どうしたの？」

梨香子 「いえ、稽古っていうか、介護みたいだなって」

涙子 「……」

梨香子 「すみません」

涙子 「……どうする？」

間

梨香子 「一つだけいいですか」

涙子 「なんですか」

梨香子 「賀来さんって呼ぶのはやめていただけますか」

涙子 「……」

梨香子 「好きじゃないんです。なんか、水戸黄門みたいで」

涙子 「ああ……」

梨香子 「梨香子、ね」

梨香子 「はい」

涙子 「……いつでも本番だと思いなさい。私の家に入ったらここはもう舞台」

梨香子 「ここが舞台」

涙子 「……舞台に必要な最低条件っていうのがあってね。なんだと思う？」

梨香子 「最低条件……」

涙子 「そう3つある」

梨香子 「台本……ですか？」

涙子 「アドリブだってできなくはないでしょ。絶対に必要というわけじゃない」

梨香子 「じゃあ役者？」

涙子 「そうそれが一つ目。役者が必要ね。二つ目は場所。場所がないと舞台にはならない」

梨香子 「劇場ですか」

涙子 「それだけじゃない。どこでだってお芝居はできるの。路上だって、ぼろい家でだって」

梨香子 「……」

涙子が倒れる。

梨香子が悲鳴をあげながら支えに行く

涙子 「気を抜かない！」

梨香子は涙子を戻してソファに座り込む

涙子 「まったくひ弱なんだから」

梨香子 「もう一つはなんですか？」

涙子 「なにが？」

梨香子 「舞台の最低条件の3つ目。一つ目は役者、二つ目は場所、三つ目は」

涙子 「三つ目は……考えてごらん。ほら、顔洗っておいで」

梨香子が出ていく

三国 「変わったトレーニングですね」

涙子 「そう。あなたもやってみる？」

三国 「いやいやいや……いいです」

涙子 「体験してみなさいよ」

三国 「私重いんで。怪我させちゃう」

涙子 「大丈夫ですよ……ああ。思い出した！」

三国 「なんですか？」

涙子 「弟さん（太っているジェスチャー）」

三国 「ああ（太っているジェスチャー）」

涙子 「あの子ね！懐かしいわあ。身体のおっきい子よね？」

三国 「そうですそうです。かなり大きめで」

涙子 「三国……」

三国 「壮太です」

涙子 「ああ思い出した。壮太君。大変だったのよ。今のやつやったんだけどさ、もうどう考えても支えられないわけよ。でも信頼してもらわなきゃと思って」

三国 「どうしたんですか？」

涙子 「佐渡島呼び出してね。こっそり二人で支えてた」

三国 「ばれなかったんですか？」

涙子 「目つぶらせてるからね。先生すごい！手が4本あるみたい！って感動してたっけ」

三国 「どんな生徒でもこのトレーニングから始めるんですか？」

涙子 「体を使うことを覚えないとね。頭からっぽにして」

三国 「なるほど。まずは頭を空っぽにして信頼することを覚える。そこから台本に進むんですね」

涙子 「まだまだ」

三国 「まだですか？」

涙子 「翌日は発声練習から始めました」

4場 レッスン2日目

梨香子が発声練習を始める。

梨香子 「あ・え・い・う・え・お・あ・お」

涙子は周りを歩きながら梨香子の様子を見ている。

梨香子は体が緊張している。涙子が緊張しているところを指摘しながら指導する。

涙子 「待って……あのね。オーディションが近づいてきて焦るのはわかるけど、基礎からしっかり作らなきゃ意味がないでしょう。緊張するのはまだ早い」

梨香子 「あ、いえ……そうじゃなくて」

涙子 「なに。じゃあなんでそんな構えてるの」

梨香子 「先生がいつ倒れるかわからないので」

涙子 「……私もバカじゃないのでトレーニングの妨げになるときはやりませんよ」
梨香子 「よかった」

梨香子、力を抜く
涙子が倒れそうになる

梨香子 「先生！」

なんとか涙子を支える。

梨香子 「先生いじわるです！」

涙子 「なにがいじわるなもんですか。稽古でしょ」

梨香子 「こんな稽古意味あるんですか？」

涙子 「ありますよ。舞台上ではどんなことでも起こる。いつ何時トラブルが起きても対応できるようにするもんです」

梨香子 「心臓が持ちません」

涙子 「何事も慣れです。ストレッチして。体ほぐしなさい」

梨香子、ストレッチを始める

涙子 「……ねえ聞きたいんだけど、なんでこのオーディション受けることにしたの？
新国立だよ？新人が立てるような舞台じゃないのに」

梨香子 「それは佐渡島さんが」

涙子 「佐渡島が決めたの？」

梨香子 「はい」

涙子 「そもそも佐渡島とはどこで？」

梨香子 「母の古い知り合いだそうです。私が役者やってみようかなって言ったら、母が紹介してくれたんです。それで」

涙子 「そういえば、お母さんがどうのつて言ってたね」

梨香子 「母は女優になりましたかったらしいんです。でもうまくいなくて。私にもチャレンジして欲しいらしくて」

涙子 「……それだけ？」

梨香子 「まあ…そうですね」

涙子 「はあ……」

梨香子 「なんですか？」

涙子 「（三国に）それを聞いたときに、なんだか全部わかつちやったんですよ。ああ押し付けられたんだなって」

三国 「押し付けられた？」

涙子 「これは書かないですよ？たぶんね、梨香子の母親は、佐渡島の昔のこれ（小指）ね」

三国 「ええ？」

涙子 「そういうやつなのよ」

三国 「なるほど……」

涙子 「まあ役者やるのに、そんな大きな動機が必要とは思わないけど、梨香子は、言葉を選ばずに言えば事務所的に大事な子じゃなかったってこと。だから私なんかのところに寄越されたんだなって」

三国 「……」

涙子 「ああごめんなさい。弟さんもそうだって言ってるわけじゃなくて」

三国 「いえ、お気になさらないでください。私は弟の芝居が好きだったけど、プロから見たら違うこともあるだろうし。でもすごく楽しそうにやったから、先生のレッスンの後にキツパリ辞めた時は驚いたんです。何があっただらうって」

涙子 「ごめんなさいね、でも私が辞めさせたわけじゃないのよ」

三国 「もちろんです！それに先生のお話を聞く限り、立派に講師を務めてらっしゃったと思います」

涙子 「立派？」

三国 「はい。梨香子が名前を出すのもわかります。先生の指導が良かったんですよ」

涙子 「……少し疲れましたね。休憩にしましょう」

三国 「先生？」

涙子 「飲み物とか、適当にどうぞ」

三国 「……ありがとうございます」

涙子が立ち上がる

三国 「あの」

涙子 「なんですか」

三国 「先生の動機はなんなのでしょう。役者をやる……」

涙子 「……私も同じです。大した理由はない」

三国 「……でも、これだけ長く続けていらつしやるのに」

涙子 「……辞めたってなんにもならないですからね」

三国 「え？」

涙子 「ちょっと失礼しますね」

涙子、部屋を出ようとして、立ち止まる。

涙子 「さっき、立派って言ったでしょ」

三国 「はい。立派な先生だと」

涙子 「私が立派に見えるのは、演じているからね」

三国 「……演じている」

涙子 「……古い話だから。記憶もあいまいだし、話半分で聞いてちょうだい」

涙子が出ていく。

三国、涙子がいないことを確認して、部屋を探り始める。

デスクの中からアルバムを見つける。アルバムをめくり始める。
暗転

5場 レッスン3日目

佐渡島と梨香子がいる。

梨香子はキッチンにいて、佐渡島はゴルフの素振りをしている

佐渡島 「まだ？」

梨香子 「先生が戻ってからです」

佐渡島 「いいじゃん。まだかかるよたぶん」

梨香子 「待ってください」

佐渡島 「はい」

間

佐渡島 「どうなの稽古は」

梨香子 「進んです」

佐渡島 「いい感じ？」

梨香子 「はい」

佐渡島 「……ねえなんか冷たくない？」

梨香子 「……」

涙子が帰ってくる

涙子 「ちょっと佐渡島」

梨香子 「ごめんなさい先生」

涙子 「すぐ帰るって言ったじゃない」

佐渡島 「不用心だよ？鍵の場所、前からずっと一緒じゃない」

梨香子 「先生、すみません。私は待つてようっていったんですけど、佐渡島さんが…」

涙子 「何しにきたの」

佐渡島 「仕事のついでにこの子送ってきたんだよ。そんな言い方しなくてもいいじゃん」

涙子 「じゃあどうぞお引き取りください」

佐渡島 「待て待て。コーヒー淹れてくれてんだよ」

梨香子 「あ、ごめんなさい勝手に」

涙子 「コーヒー？」

梨香子 「私の実家が喫茶店やってるんです。うちにあるドリップ用のセットを持ってきました」

佐渡島 「いつも缶コーヒーだろ？」

涙子 「悪かったね」

梨香子 「いえ！そうじゃなくて。私も缶コーヒー好きなんですけど、ちょっと手間かけるだけで結構変わるので。どうかnaと思って」

佐渡島 「トゲトゲすんなよ」

涙子 「誰のせいだと思ってるの。……いただきます」

梨香子 「すぐご用意しますね」

佐渡島 「どう？順調？」

涙子 「興味ないくせに」

佐渡島 「そんなことないよ。無理言ってるからさ。申し訳ないなと思ってるよ。でも梨香子の話を聞く限りじゃあ、ちゃんと先生やってるっぽいじゃん」

涙子 「……」

佐渡島 「オーデは……明後日だっけ？二次通ったら結構すごいよ。今後も講師業でやっていけるかもね」

涙子 「ま、私が受かりますからね」

佐渡島 「ん？」

涙子 「私も入ってますよね？二次審査に」

佐渡島 「いや（笑う）……」

涙子 「言いましたよね」

佐渡島 「本気で言ってたのかよ」

涙子 「え、入ってないの？」

佐渡島 「無理に決まってるんだろ。締め切り過ぎてたのに」

涙子 「はあ？あんたあの時うなづいてたじゃない」

佐渡島 「ジョークだと思ったんだよ」

涙子 「……」

佐渡島 「あ、じゃあそういうことで。頼むな」

梨香子 「あれ？コーヒー」

佐渡島 「ごめん！仕事なんだ。帰りは電車でするしく」

佐渡島 出ていく。

涙子 「ああいうやつなのよ」

梨香子 「先生、コーヒーどうぞ」

涙子 「ありがと。確かに香りがいいね」

梨香子 「そうなんです」

ため息をつく涙子

梨香子 「どうしたんですか？」

涙子 「いや、ちょっとやる気がなくてね」

涙子、三国に話しかける

涙子 「ねえ……まだ聞きたいの？」

三国 「どうしてですか？もちろんです」

涙子 「特に面白いことはないですよ」

三国 「でもまだレッスンは途中だし、台本をぜんぜん使っていないじゃないですか」

涙子 「この後から台本稽古に入ります」

三国 「素人考えで申し訳ないんですが、すぐに台本を使って稽古するもんだと思ってました」

涙子 「台本はね、もちろん大事だけどあくまで土台は役者個人の力量だから。土台を固めないとね」

三国 「なるほど。土台ができて、いよいよ台本稽古ということですね。楽しみです！」

涙子 「そう？期待するようなものではないですよ。では、どうぞ」

梨香子 が出てきてわけのわからない言葉を必死にしゃべる

梨香子 「×××××××××××××××！」

三国 「な、なんですかあれは」

涙子 「ジブリッシュっていうの」

三国 「ジブリ？」

涙子 「そう。存在しない言語でしゃべるっていうトレーニング」

三国 「はあ……あの、台本稽古は？」

涙子 「してるじゃない。カタリーナのセリフをジブリッシュでしゃべってます」

梨香子 が頭を抱えて座り込んでいる

三国 「なんか落ち込んでますよ」

涙子 「結構恥ずかしいんだよね、最初は。……そういえば昔の生徒で三島っていう子がいたんだけどさ、やりたくない！ってキレられて」

梨香子 「これなんの意味があるんですか？」

涙子 「（三国に）こんな感じ。……私たちって日本語理解できるじゃない？だからよ」

三国 「ええ？」

涙子 「適当にしゃべっても相手に伝わっちゃうからさ。本当に、必死に、相手に伝えるっていうことを学ばなきゃいけない」

梨香子 「すいません、もうこれ……」

涙子 「なに」

梨香子 「いえ」

涙子 「……もういいですよ。ここまでにしましょう」

梨香子 「え」

涙子 「もう一通りのことは教えましたよ。あとは台本を読んで、自分なりの解釈でやればなんとかなるでしょ」

梨香子 「でも先生……先生ご自身の稽古はいいんですか？」

涙子 「え？」

梨香子 「先生もお受けになるんですよね」

涙子 「ああ……ダメだったみたい佐渡島の手違いだね。だからここで終わり」

梨香子 「……あのひとつお聞きしてもいいですか」

涙子 「なに？」

梨香子 「舞台に必要な三つの要素のこと。一つ目は役者、二つ目は場所、その三つ目は、私じゃないですか？」

涙子 「あなた？」

梨香子 「考えたんです。舞台があつて、役者が出てくる。あとひとつ足りないもの。それは役者を見る私だって」

涙子 「……その通り、三つ目は観客」

梨香子 「やった」

涙子 「まあちよつとはわかつてきたみたいね。そう、私たちは見てくれるお客さんが居てくれないと成り立たない。だからお客さんの存在を絶対に忘れちゃいけない」

梨香子 「はい」

間

涙子 「……っていうかさっきの答え、私ってなによ。まだお客さん気分なの？」

梨香子 「あ……」

涙子 「あなたはもう役者。役者目線でものを考えなさい」

梨香子 「はい」

涙子 「セリフやるよ」

梨香子 「はい！」

三国 「やっと台本稽古ですね！」

涙子 「（三国に）『じゃじゃ馬ならし』のお話はご存じ？」

三国 「すみません、不勉強で」

涙子 「あるところに大富豪の娘姉妹がいました。姉のカタリーナ、妹のビアンカ。姉は気が強いじゃじゃ馬で妹や周りの人に暴力をふるうくらい乱暴者、妹はおしとやかな淑女。男たちは妹と結婚したがるんだけど、姉妹の父は『姉カタリーナに結婚相手が見つかるまでは妹は誰にもやらん』というわけ。そこでペトルーキオという男が、カタリーナと結婚してもいいと言いつつ、ペトルーキオはカタリーナというじゃじゃ馬を調教して、見事に夫をたてる妻にしたとあげる、というお話」

三国 「はあ……なんか。ちよつと現代的ではないというか。問題になりそうなお話ですね」

涙子 「まあね。でもこれは昔の話だし、ただの男尊女卑のお話ではないわけよ。だから今でも使われる」

三国 「なるほど」

涙子 「課題のセリフは、最後のシーン、すっかりじゃじゃ馬がナリをひそめたカタリーナが夫のために言うセリフ」

梨香子がセリフを読む

梨香子 「まあ、なんという顔なさるの！その眉根の皺を解いて、怖い目つきをおやめになつたら。それは御主人を傷つけることよ、あなたの殿様を、あなたの王様を。そればかりではない、御自分の美しさを……」

涙子 「どうしたの？続きは？」

梨香子 「あの……納得いかないんですけど」

涙子 「なに」

梨香子 「このお話は酷くないですか」

涙子 「ひどいって？」

梨香子 「全編読んできたんですけど、結局女は男に力で押さえつけられて、言いなりになるしかないってことですか」

涙子 「あのね、これはもう何百年前のお話なのよ。今とは価値観が違って当然」

梨香子 「わかってます。私がいいたいのは」

涙子 「怒ってる？」

梨香子 「怒ってません。ずっと先生とこの話がしたかったんです。なのに全然台本使わないから……」

涙子 「悪かったよ」

梨香子 「価値観が違うのはわかります。でもその台本を現代で使う意味はなんですか？」

涙子 「ええ？」

梨香子 「いまこのお話を使う意味があるんですか？」

涙子 「プロデューサーに聞きなさいよ」

梨香子 「オーディションのときに聞けばいいですか」

涙子 「そんなことしたら落ちるって」

梨香子 「なんでですか」

涙子 「そりやそうでしょ。オーディション受けるのに、この台本をやる意味なんですかって、そんなやついないでしょう。嫌なら受けなさいい」

梨香子 「嫌じゃないです。わからないんです」

涙子 「……まあとにかくやってみなさいよ」

梨香子 「……」

涙子 「返事は？」

梨香子 「……はい」

梨香子、立ってセリフを言い始める

梨香子 「まあ、なんという顔なさるの！その眉根の皺を解いて、怖い目つきをおやめになつたら。それは御主人を傷つけることよ、あなたの殿様を、あなたの王様を……」

涙子 「はいはい。……何その顔」

梨香子は眉間に深いしわを寄せている

涙子 「そんな顔で言うセリフじゃないでしょ」

梨香子 「どうなってます？」

涙子 「しわ」

梨香子、あわてて顔をほぐす

梨香子 「すみません。昔からこうなんです。顔に出やすいっていうか……」

涙子 「まいったね……」

梨香子 「先生はそういうことないんですか？このセリフ納得いかないとか、この役はやりたくないとか」

涙子 「ありませんよ」

梨香子 「ないんだ」

涙子 「あのね、役者を馬鹿に……よし、腿上げしましょう」

梨香子 「腿上げ？」

涙子 「はい行きますよ。いっせーの」

涙子が手をたたいて梨香子を腿上げさせる

梨香子 「なんですか！」

涙子 「やりなさいよ」

涙子が腿上げをしはじめる。

涙子 「ほら私に負けんな」

梨香子がしょうがなく腿上げをする

涙子 「役者っていうのは、自分がやりたいとかやりたくないとかじゃないの！与えられた役を表現するのが仕事！まずとにかくやる。役者にNOはないの！聞いてる？」

梨香子 「聞いてます！」

涙子 「私は昔、ダンゴムシの役をやったことがあります！」

梨香子 「ダンゴムシ？」

涙子 「ダンゴムシの気持ちわかりますか？」

梨香子 「わかりません！」

涙子 「わからなくてもやるの！丸まるの！それが役者……」

涙子、しゃべれなくなる。梨香子といっしょに腿上げをやめる

涙子 「さあ……セリフ……やって」

梨香子 「まあ、なんという顔なさるの！その眉根の皺を解いて、怖い目つきをおやめになつたら。それは御主人を傷つけることよ、あなたの殿様を、あなたの王様を。

そればかりではない、御自分の美しさを台なしにする、霜が牧場をよこすように」

涙子 「はい」

梨香子 「何の意味があるんですか……」

涙子 「（眉間を指さす）」

梨香子 「……」

涙子 「あーしんど」

梨香子 「……」

涙子 「私が若いころはね、舞台袖で腿上げをしてから舞台に出たもんよ」

梨香子 「そうなんですか」

涙子 「心をからっぽにしてやってみなさいよ。意味はお客さんが勝手に見つけるもんだから」

梨香子 「はい。もう一回いいですか」

涙子 「ちよっと休憩してるからどうぞ」

涙子、ソファに横になる

梨香子はセリフを読む

三国 「ありがとうございます。実際に腿上げまで見せていただいて」

涙子 「あの頃はもうちよつとできたんだけどね……」

三国 「役者にNOはない、というの重い一言ですね」

涙子 「……本当のことというと方便っていうか。役者をやりたい人はたくさんいるからさ、あの役はいやだこの役はいやだっていつてたらほかの役者に取られちゃうんだよね。だから断るなつてね」

涙子が起き上がる

三国 「やはり先生のレッスンはすごいですね。素人だった梨香子をどんどん変えていく」

涙子 「そんなことはありませんよ。誰だつてやる当たり前のトレーニングなんだから」

三国 「……そうは思えないです。ここが賀来梨香子の原点なんだから」

涙子 「……ねえ、もう終わりにしない？」

三国 「なぜです？まだレッスンの核心に触れてないじゃないですか」

涙子 「ないんですよ、そんなものは。しんどいのよ。思い出していると自分の無能さを思い出しちゃつて」

三国 「無能だなんて。先生のレッスンは生徒の人生を変える力を持つてると思います」

涙子 「推測で言われても困るんだけど」

三国 「推測じゃないんです。弟が、言っていたんです。涙子先生にあえてよかったつて」

涙子 「え？」

三国 「先生のレッスンは弟になにか大きな影響を与えたんですよ」

涙子 「……三国さん、そろそろいいんじゃない？あなた本当は梨香子とのレッスンのことを聞きにきたんじゃないんでしょう？」

三国 「え？」

間

涙子 「……弟さん、私を恨んでいるの？」

三国 「……」

涙子 「辞めることになってしまったから、私に恨みがあるんじゃない？だから、姉であるあなたが私の様子を見るに……」

三国が吹き出す

涙子 「笑わないでよ」

三国 「ごめんなさい。恨みなんていうから」

涙子 「違うんですか？」

三国 「違います。ご心配なく。弟は先生に感謝していました」

涙子 「そう……」

三国 「なんか探偵みたいでした」

涙子、手で顔を覆う

涙子 「だって……」

三国 「恨まれる覚えがあるんですか？」

涙子 「……」

三国 「もう少しじゃないですか。ここまでお伺いしたんですから。最後までお聞きしたいです」

涙子 「そう……わかった。じゃあ……二次審査の日ね」

梨香子が鞆を持って出ていく準備をする

梨香子 「では先生、行ってきます」

涙子 「ええ。まあせいぜい頑張ってください」

梨香子 「オーデイションの前に腿上げはしたほうがいいですか？」

涙子 「その場の雰囲気。柔軟に対応しなさい」

梨香子 「先生、私、受かると思いますか？」

涙子 「……ひとつ覚えておいて」

梨香子 「はい」

涙子 「オーデイションの時は、自分を選んでもらいたいって必死になるよね。でも、あなたも選ぶことを忘れないで」

梨香子 「選ぶ?」

涙子 「そう。自分にふさわしいかどうか。選ぶ方が偉いなんてことはないから」

梨香子が倒れそうになり涙子が慌てて支えに行く

梨香子 「できるようにになりました!ありがとうございます先生」

涙子 「そうね……」

梨香子 「会場で急に倒れて演出家の方が支えてくれるか確かめてみていいですかね?」

涙子 「……やめときなさいよ」

梨香子 「すいません。さっきのお話……」

涙子 「……思いつきりやつてらっしゃい」

梨香子、頭を下げ出ていく

6場 レッスンの終わり

涙子、落ち着かない時間を過ごす

照明が夕方になり、夜になり、朝になる。

うとうとしているところに、佐渡島が顔を出す

佐渡島 「よう!」

涙子 「どうしたのよ急に」

佐渡島 「梨香子が本を借りてたんだって?ありがとな。返しとくよ」

涙子 「ああ……」

佐渡島 「じゃ」

涙子 「ちょっと」

佐渡島 「なに」

涙子 「どうだったの……あの子」

佐渡島 「どうって?」

涙子 「二次審査、ダメだったでしょ」

佐渡島 「ああ通ったよ」

涙子 「え?」

佐渡島 「通った。ありがとな。次の土曜に最終審査があるんだ」

涙子 「そう」

佐渡島 「じゃあまた、よろしくな」

佐渡島が出ていく

涙子が声にならない喜びを表現する

佐渡島が戻ってくる

佐渡島 「そうそう言い忘れた」

涙子 「なに」

佐渡島 「講師のギャラ、来月末に振り込むな。1日1万つてことで悪いけど」

涙子 「ああはいはい。で、次は？」

佐渡島 「次？」

涙子 「あの子はいつくるの？」

佐渡島 「ああもういいんだ。ありがとな」

涙子 「……え？」

佐渡島 「無理言って押し付けちゃって悪かったな。後はこつちで面倒見とくからさ」

涙子 「ああ……そうなの、でも乗りかかった船だから、最後までやりますよ」

佐渡島 「いやいいいよいよ。気にしなくて」

涙子 「でも……」

佐渡島 「あの子も他の人にも見てもらいたいって言ってるからさ」

間

涙子 「……そう」

佐渡島 「じゃあそういうことで。まだだれか見てもらうかも知れないから。決まったら連絡するな。頼りにしてるよ涙子先生」

佐渡島、出ていく

一人になる涙子

間

涙子 「はい、おしまい」

三国 「……え？」

涙子 「だから言ったでしょう。大した話はできないって」

三国 「これで、終わりですか」

涙子 「そう。これで私のレッスンは終わり」

三国 「……」

涙子 「残念でしたね、長いことお話を聞いてもらって。記事にはならないでしょ？」

三国 「本当にこれで終わりなんですか？そのあと梨香子と連絡をとったりは」

涙子 「まったくありません。先日のスピーチまで忘れてたくらい」

三国 「では……なぜ梨香子はスピーチで先生の名前を出したんでしょう？」

涙子 「それこそ梨香子に聞いてくださいよ。そうでしょ？ さ、そろそろよろしい？
夕飯の用意をしなきゃ」

三国 「……」

涙子 「弟さんによろしくね」

三国 「弟へのレッスンはどんな感じだったんですか？」

涙子 「大して変わらないですよ。今お話したのと同じようなものです」

涙子、コーヒーセットを片づけ始める

三国 「あの…お願いします、このままじゃ記事にならないのもうちちょっとお話ただけませんか」

涙子 「もう何もありませんから」

三国 「でも」

涙子 「いい？これでおしまい。わかりましたか？」

三国 「じゃあ…私にレッスンしていただくっていうのは可能ですか？」

涙子 「は？」

三国 「お願いする場合、おいくらくらいお支払いしたらいいですか？」

涙子 「ちよつと……」

三国 「実は結構興味あつて。舞台立ってみたいなつて。弟の手前言い出せなかつたんですけど結構あこがれなんですよね。この年齢からだど厳しいとは思うんですけど」

涙子 「待ちなさいよ」

三国 「……」

涙子 「いい加減にして。何が目的なの」

三国 「……目的なんて……」

涙子 「本当は何しに来たの」

三国 「なんの話ですか？私は梨香子のこと……」

涙子は机にある三国の名刺を手取る

涙子 「もう退職なさつてるんですつてね。何年も前に」

三国 「え」

涙子 「確認したんですよ。会社に問い合わせてね。どうして嘘をついたの」

三国 「……すみません。あの、今は名刺を持っていなくて」

涙子 「そういう問題じゃないでしょ。メールをいただいたときに書いてありましたよね？週刊民衆のつて。詐欺ですよ」

三国 「……」

涙子 「老人だと思つて甘く見たんでしょう。さんざん言われてるんですよ。相手のいうことを鵜呑みにせずに確認しましょうつて。だから必ずこちらから連絡するようにしてるんですよ。オレオレ詐欺対策。今は老人が一番疑り深いんだから」

三国 「……知つてて取材を受けてくださったんですね」

涙子 「……見てみたかつたんですよ。どんな奴が来るのか。何をしに来るのか」

三国 「……」

涙子 「話す気がないならもうお帰りください」

涙子がコーヒーセットをキッチンに運ぼうとする。

三国 「先生も嘘をついていらつしやいますよね」

涙子 「なんのこと」

三国 「弟のこと、忘れてたっていうのは嘘です」
涙子 「……」

三国は自分の鞆から涙子のアルバムを取り出し見せる。

涙子 「あなた……」

三国 「覚えてますよね？ちゃんと写真に撮って。弟も写ってる。どうして忘れてるフリをしたんですか」

涙子 「返さない」

三国 「答えてください」

涙子が近づこうとすると三国はコーヒーを手に取りアルバムにかけようとする

三国 「答えて」

涙子 「何やってるのあんた……」

三国 「どうして嘘ついたんですか？」

涙子 「……まず返してくれない？大切なものの」

三国 「答えてください」

涙子、うつむいてソファに座る

涙子 「お願い……」

三国、いたたまれなくなってアルバムを涙子に差し出す
と、涙子が勢いよくアルバムを奪い返す

三国 「あ！」

涙子 「早く出てって！」

三国 「酷いじゃないですか！」

涙子 「どっちが！盗人女！」

三国 「……」

涙子 「もういいです。警察を呼びます」

三国 「先生」

涙子 「私が間違っていました。早くこうすればよかった」

涙子、スマホを手に部屋の角へ。電話しようとする

三国 「先生！」

三国が倒れ始める

涙子がスマホを放り出して三国を支える

この後は三国を支えながらの会話

涙子 「何してんの!」

三国 「先生、本当のことを言ってください!」

涙子 「なにが!」

三国 「何を教えてるんですか!」

涙子 「何のこと……早く起きてよ!」

三国 「弟に何を教えたんですか!」

涙子 「弟に聞きなさいよ!」

三国 「聞けないんです!」

涙子 「なんで!」

三国 「死んじやったので!」

涙子 「ええ?」

三国 「死んじやったので!」

涙子の力が抜けて二人で倒れこむ

二人とも息を整える

三国 「……めちやくちや怖いんですね、これ……」

涙子 「……死んだ?」

三国 「……」

涙子 「弟さん、お亡くなりになったの?」

三国 「はい」

涙子 「……なんで。ご病気?」

三国 「(首を振る)」

涙子 「事故?」

三国 「(首を振る)」

涙子 「……」

三国 「先生のレッスンのあと、弟は役者を辞めて就職したんです。でも会社でいろいろあったみたいで」

涙子 「……そう」

三国 「弟は、壮太は、ずっと役者になるって夢を持ってたんです。でもあるとき、キツパリ辞めた。その時に言っていたのを思い出したんです。いい先生に巡り合ったって」

涙子 「……」

三国 「ずっと忘れていたんです。でも賀来梨香子のスピーチを聞いたときに思い出したら、あの時確かに弟は涙子先生って言ってた」

三国がカバンから書類の束を出す

三国 「これ」

涙子 「なにこれ」

三国 「先生の生徒さんたちです。調べられた分だけですけど取材してきました」

涙子 「……」

紙を一枚取り出す

三国 「先ほど、ジブリッシュのトレーニングで三島の名前が出ましたよね、三島香織。

彼女はいま、海外で通訳の仕事をやっています」

涙子 「……そう」

三国 「他の人も。役者を辞めてる人が多いですね」

涙子 「……何がしたいの」

三国 「先生が辞めさせたんですか」

涙子 「そんなわけ……」

三国 「梨香子が先生の名前を出したのは何でなのでしょう。弟も。先生に感謝してた」

涙子 「……」

三国 「知りたいんです」

涙子 「……」

三国 「先生、本当のことを言ってください。生徒たちに、弟に、本当はここで何を教えているんですか？」

涙子 「……あの後、佐渡島が慌てて戻ってきたの。それで……もう一度だけ梨香子に会うことになった」

7場 レッスンの始まり

佐渡島が慌てて駆け込んでくる。

佐渡島が語る間、涙子はコーヒートの準備をしている。二人は違う時間にいる。

佐渡島 「ナミ、悪いんだけど最後にひとつお願いできる？実はさ、このオーディションにうちからもう一人参加してるんだよ。その子売り出そうってことで、向こうのプロデューサーと話ついてたんだよね。なのに演出家が妙に梨香子を気に入っちゃってるみたいなんだよ。このままだとどうなるかわからなくて。だからさ、わかるよね？梨香子はまた別の機会にっこにしたいんだ。残念だけど、あの子ならまだチャンスあると思うし。ちょっと言っというってもらってもいい？俺が言うより、ナミが言った方が説得力あると思うしさ。そういう世界を生き抜いてきた先輩から聞くと違うと思うのよ。あとで梨香子をよこすからさ。オーディションは辞退するってことで、よろしくな。……いつも助かってるよ」

佐渡島が涙子の肩に手を置いて、出ていく。

少しして、梨香子が入ってくる。

梨香子 「失礼します」

涙子 「コーヒー淹れてみたんだけど。あんまりおいしくない。あなたが淹れたほうが美味しかった」

梨香子が座ってコーヒーを飲む

涙子 「あのね」

梨香子 「大体のお話は佐渡島さんからお聞きしました」

涙子 「そう」

梨香子 「先生の指示を仰ぎます、と佐渡島さんにはお伝えしました」

間

涙子 「二次審査に通ったのは誇っていい結果だった。とても頑張ったと思うし、あなたには才能があるのかもね。……あなたにはたくさんの方のチャンスがめぐってくると思う」

梨香子 「……」

涙子 「私は……辞退したほうが、結果的にあなたにとって良いことが起こると思うの。まだ人生は長いし、この舞台に固執することはない。理不尽に感じるかも知れないけど……台本ってさ、設計図じゃない？その設計図に併せてみんな仕事をする。でも台本のもっと外側に別の設計図もあるの。舞台に出ていない事務所とかプロデューサーとか、そういう人たちも設計図に沿って働いてる。そうやってひとつの作品ができる。私たち役者は、その一つの部品。これは別にダメなことじゃないの。大きなものをつくるには、たくさんの方が必要だから。……わかる？」

梨香子 「……ずっと思っていたんですけど、先生は説明がとても上手です」

涙子 「……佐渡島はひどい奴だけど、でも……この世界に向いてる。あの人のいうことを聞いていけば、良い方向に進むと思う。いやだと思うけど、みんなが敵ってわけじゃない。それをわかってほしい。だからここはぐっと我慢して」

梨香子 「カタリーナのようにですか？」

涙子 「……え？」

梨香子 「先生に言われた通り、心を空っぽにしてセリフを読んだら、なんだかスツとわかったんです。カタリーナはただ調教されただけじゃない。生き方を学んだんだって。カタリーナは妹とか周りの人に暴力を振るっていたし、周りに迷惑がられていたんですよね。でも自分に負けない男が現れて、初めて知ったんだと思います。このやり方ではうまくいかないんだって」

涙子 「……」

梨香子 「だからあのカタリーナのセリフは、男に屈服しただけじゃなくて、周りの人たちや、町や、国のルールや、時代なんかと一緒にうまくやっていく術を学んだってことなのかもなって」

涙子 「……そうかも、だから」

梨香子 「でも、それだけじゃないと思うんです」

涙子 「え」

梨香子 「カタリーナは、今、変わり始めたところなんだと思うんです。それまでの生活に、新しい考え方とか、理解できない人とか、どうにもならないことが起こって、カタリーナは変わり始めたんです。たしかに今は服従することでは生きられないかもしれない。でも1年後はそうじゃないかもしれない。10年後はどうなってるかわからないですよ。この台本にはそこまで書かれてないけど、台本が終わってもカタリーナは変わり続けるんだと思うんです」

涙子 「……」

梨香子 「もう少し、カタリーナを知ってみたいなって思ってます。先生の解釈も教えていただきたいです」

涙子 「……私の秘密をひとつ教えてあげる」

梨香子 「なんですか」

涙子 「レッスンの最初、ずっと台本を使わなかったでしょ？なんでかわかる？……私、『じゃじゃ馬ならし』ちゃんと読んだことなかったのよ。だから最初の数日、あなたが帰ったあとに必死に台本を読んだ。あなたに何か聞かれたら答えられるように」

梨香子 「……そうだったんですか」

涙子 「家にあった本は勢いであなたに上げちゃったからあの後もう一冊買いにいったからね」

梨香子 「そうおっしゃってくればよかったのに」

涙子 「嫌いなよ。あの話。昔からずっと。古臭い価値観」

梨香子 「……」

涙子 「あなたは私よりずっと役者に向いてる。ごめんなさいね、こんな先生で」

梨香子 「私もひとつ、秘密を告白します」

涙子 「なに」

梨香子 「実家が喫茶店だって言ったじゃないですか」

涙子 「……嘘だったの」

梨香子 「先生に気に入られたくて、なんか話題がないかなと思って。コーヒーしか思い浮かなかったんです。コーヒーセット買って、淹れ方調べて。先生にコーヒー淹れたとき、初めてで手が震えてました」

二人で笑う

涙子 「あんた、立派な役者じゃないの」

梨香子 「すみませんでした」

間

梨香子 「先生、私、どうしたらいいでしょうか？」

涙子 「……あなたが決めなさい」

梨香子 「あの……先生だったらどうしますか。先生もこういうことあったんですか？」

涙子 「……無かった」

梨香子 「……そうですか」

涙子 「……私には選択肢がなかったから」

梨香子 「役者に_ろは無い、ですもんね」

涙子 「……梨香子」

梨香子 「考えてみます。次の稽古までに」

涙子 「え？」

梨香子 「また、レッスンをお願いできませんか」

涙子 「……もういいですよ」

梨香子 「……」

涙子 「私のレッスンは終わり」

梨香子 「……先生」

涙子 「もうやめましょう」

梨香子 「先生、わたし」

涙子 「気にしないで。あなたの言う通り、他の人に見てみてもらった方がいい」

梨香子 「……え？」

涙子 「……え？」

梨香子 「私が？」

涙子 「そういったんでしょう？佐渡島に」

梨香子 「言ってないです。私は佐渡島さんから、先生がもううんざりだつて言つてたつて」

涙子 「言っていないですよ」

間

涙子 「どうやってあいつ殺す？」

梨香子 「硬いものをぶつけましょう」

涙子 「……本当にもう……」

涙子、
頭を抱える。

梨香子 「じゃあまた教えてくれますよね？」

涙子 「……」

梨香子 「また明日、来てもいいですか？」

涙子 「……」

梨香子 「先生」

涙子 「いえ、おしまいにしましょう」

梨香子 「……」

涙子 「別の人に教わった方がいい」

梨香子 「……先生」

涙子 「私を先生と呼ぶのはやめて」

梨香子 「え？」

涙子 「私はなにも教えてない。むしろ教えられてばかり」

梨香子 「そんなことないです…先生は」

涙子 「もう帰りなさい。私はあなたの先生じゃない」

梨香子が立ち上がり、頭を下げて出ていく

梨香子を見送ったあと、『じゃじゃ馬ならし』を床にたたきつける。

涙子 「……私はあの子に先生なんて呼ばれる資格はないんですよ」

三国 「……どうしてレッスンを続けなかったんですか」

涙子 「……あの子には才能があった。私が教えるよりもっと適任者がいますよ」

三国 「そうでしょうか」

涙子 「結果をみれば明らかでしょ？」

三国 「……」

涙子 「あの子は成功した。私が教えなかったからね。レッスンの秘密がわかったでしょう。私が梨香子にできたのは、あの子を手放すことだけ」

三国 「……そのあと生徒を取り続けたのはなんでですか」

涙子 「言ったでしょ？事務所から頼まれたから」

三国 「先生！」

涙子 「本当のことです！辞めてどうするんですか。私が辞めたとしても何も変わりませんよ。……私のところに送られてくる子は、役者としては期待されない子ばかり。私にできるのは、そういう子たちに違う道もあるっていうことを気づいてもらうことだけ。あなたの弟も。ごめんなさいね。あなたからのメールをもらったとき、話したいと思った。あなたのことは壮太さんから聞いていたしね。壮太さんがいまどうしているのか……壮太さんは、自分より周りの空気を優先してしまいう子だった。それに、楽しそうに芝居をした。続けられるなら、一生バイトし続けてもいいって言ってた」

三国 「そうです。でも辞めてしまった」

涙子 「信じてもらえないかもしれないけど、私は役者を辞めさせようとしたことはない。役者になりたいっていう気持ちは痛いほどわかるもの」

三国 「じゃあ何を教えたんですか」

涙子 「何も教えてない。ただ思いついてほしかったの。私が持てなかった選択肢を」

三国 「……」

涙子 「梨香子にはそうしてあげられなかった。だから、決めたの。私のところに来る子がいるなら、それだけは伝えなくちゃって。私は私にできることをやるしかない。服従したふりをしながら」

三国 「カタリーナのようにですか」

涙子 「……だからわかったでしょう？梨香子が私の名前を出した理由が……怒っているんですよ」

三国 「……怒ってる？」

涙子 「ふがいない私に。偉そうにしてなんにも教えられなかった私に。そうとしか思えないでしょ？ああやって名前を出して、私に当てつけてるんですよ。私はこん

なに頑張ったぞって。お前は何をしてるんだって。先生なんて呼ばれる資格はないんですよ。だから名前を」

三国 「先生……違いますよ」

涙子 「え？」

三国 「ぐちぐちぐちぐち……なんなんですか」

涙子 「……なにが」

三国 「何にもわかってない」

涙子 「どうしたのよ」

三国 「梨香子が先生の名前を出したのは、会いたいからですよ」

間

涙子 「会いたい？」

三国 「そうとしか思えないでしょ。なんですか怒ってるって」

涙子 「……会いたいって……」

三国 「先生がどう思ってるか知りませんがね、私の弟は先生に感謝してたんです。先生を慕ってたんです。梨香子だってそうなんじゃないんですか？」

涙子 「そんなわけ……」

三国 「私、弟の芝居大好きだったんですよ。めっちゃ見てました。映画だってほんのちよい役の時も全部見たし、舞台は発売日にチケット買って最前列で見ました。壮太まじでかわいい。べつに食っていけなくてもよかったのに。私が養ってあげるし。ずっと芝居してて欲しかったのに。なのに先生にちよと指導されたくらいで辞めちゃって。すがすがしい顔して。私は辞めないでって言ったのに！なんなんですか？」

涙子 「知りませんよ……」

三国 「なんで私の意見じゃなくて先生の意見を聞くんですかね。意味わかんない。私のほうが壮太好きなのに！」

涙子 「壮太さんのことはわかりました。でも梨香子は」

三国 「直接聞けばいいじゃないですか。梨香子に」

間

涙子 「え？」

三国 「会って話せるんだから。会えばいいでしょ。会えるんだから。私の弟とは違って！」

涙子 「……」

三国 「それでしょ？」

涙子 「でも……」

三国 「なんですか」

涙子 「会ってなにが言えるんですか」

三国 「言うんじゃない。聞くんです」

涙子 「……でも」

三国 「取材したんですよ他の生徒にも」

涙子 「他の？」

三国 「連絡取れる人は全員。三島香織にも。みんな言っていましたよ。あの人はいい先生だったって。なんなんですか本当に。そんなことあります？だーれも悪く言わない。役者辞めさせられてるのに」

涙子 「辞めさせてないって」

三国 「みんな言っていました。会いたいなあって。私はあなたの悪口を聞きたくて取材してるってのに。なのに、あなたの悪口をいう人はあなただけ」

涙子 「……」

三国 「……わかりました。じゃあやってみましょう」

涙子 「やる？」

三国 「練習です」

涙子 「練習って」

三国 「私がレッスンしてあげます。梨香子役をやりますから」

涙子 「何を言ってるの……」

三国 「私を梨香子だと思ってしゃべってみたらいいじゃないですか」

涙子 「あなたねえ！」

三国 「嫌なんですよ。弟が尊敬してた人がこんなしょぼくれたバアサンだったなんて」
涙子 「……そこまで言わなくていいじゃない！」

三国 「先生言っていましたよね？梨香子との共演は断ってるって。仕事は自分でつかむものだとか言ってカッコつけてたけど、でも違うじゃないですか。怖いだけです
よね？梨香子に会うのが」

涙子 「……馬鹿にしないで」

三国 「梨香子に会いますか？それとも失敗するのが怖いですか？」

涙子 「……やってやろうじゃないの」

涙子と三国が向かい合う

涙子 「あんた芝居できんの？」

三国 「あれ？まずは信頼じゃなかったんですか？」

涙子 「……」

涙子が上着を脱ぎ捨て、集中する

涙子 「梨香子……」

三国 「ああん？」

涙子 「怒ってるじゃない！」

三国 「しょうがないじゃないですか！私が怒ってるんだから」

涙子 「もういいです。どいて」

三国 「逃げるんですか？」

涙子 「馬鹿にしないで。私は役者。相手役なんていません」

涙子は深呼吸をして集中する。

涙子 「梨香子……」

梨香子が出てくる

涙子 「梨香子……あの、あのね」

梨香子 「先生……ひどいじゃないですか。私のこと見捨てて」

涙子 「梨香子……」

三国 「もつと良い想像をして！」

涙子 「梨香子……あのね、あの時はああいうしかなかったけど、でも違うの、私は……」

三国 「いいんですよ何でも。言いたいこと言ってください」

涙子 「そうね、私は……」

佐渡島が出てくる

佐渡島 「口では生徒のためって言ってるけどさ、自分のためじゃない。ナミが事務所に居続けるために講師をやってるくせに何を偉そうに」

涙子 「佐渡島……」

三国がコーヒー豆の入ったソックスを振り回し佐渡島にぶつける

三国 「余計なものイメージしないで！」

涙子 「うん。……あの、あのね……」

三国 「先生、ジブリッシュです。意味なんかどうでもいいんです。梨香子に話しかけて！」

涙子、少しずつジブリッシュで梨香子に話し掛ける。

だんだん勢いが増していき、自分の気持ちを梨香子に伝える。

涙子が梨香子を抱きしめる。

涙子が手を離すと梨香子が出ていく

涙子 「……なにやってるの、私」

三国 「梨香子に会う気になりました？」

涙子 「……」

三国が帰る支度をする

涙子 「どうしたら、いいと思う？」

三国 「先生が決めてください。選べるんだから。先生は」

三国、荷物をまとめて入口へ

涙子 「あの……」

三国 「なんですか」

涙子 「弟さんのこと、ごめんなさい」

涙子が頭を下げる

涙子 「私のせいで」

三国 「先生のせいじゃないです。弟に謝るのはやめて。ていうか私に謝ってください。もっと壮太の芝居が見たかったのに」

涙子 「……私も見たかった」

三国 「いろいろ、突っ込んだ話をしてしまってますみませんでした」

涙子 「聞きたいことは聞けたの？」

三国 「……わかりません。でも書いてみようかと思います」

涙子 「記事になりますか？こんなことが」

三国 「あ、先生じゃないです。壮太のことを書くこうと思って。私が書きたいのはそっちだって気づいたので」

涙子 「……読ませてね」

三国 「では、そろそろ。……先ほどは支えてくれてありがとうございました。嬉しかったです」

涙子 「……誰でもやるでしょ？それくらい」

三国 「そうでしょうか？……あ、それと、必ず見つけますね」

涙子 「何を？」

三国 「先生の悪口を言ってくれる生徒」

涙子 「……頑張ってるね」

三国 「あ」

三国、コーヒー豆の入ったソックスを涙子に渡す

三国 「すいません、これ、さっき……」

涙子 「……ああ。……よかったらお土産に」

三国 「結構です」

涙子 「そうよね……説明書通りに淹れたんだけどね。何がいけなかったんだろう」

三国 「見せてください」

涙子、説明書を三国に渡す

三国 「……先生、これ説明書じゃないです」

涙子 「え」

三国 「昔はこうやってましたよって書いてるだけです」

涙子 「うそ」

三国 「一番下に。コーヒーマイルで粗く挽いてください。楽な時代になりましたね」

二人で顔を見合わせる

涙子 「ごめんなさいね……」

三国 「今度は、美味しいコーヒーを飲ませてください」

涙子が三国を見る。三国が頭を下げて出ていく。

涙子は三国を見送り、アルバムを拾い、ソファに座ってめくる。

電話が鳴る。

涙子 「はい…はい。新しい子ですか？……ええあの、佐渡島さん…少しご相談させていただけでも構いませんか。はい…はい。あ、あと……この間のお話、はい。やっぱり、お受けしようと思うんです。……はい、梨香子に連絡を取れますか……はい。よろしくお願いします」

電話を切る。

涙子、窓から外を眺める。

おわり